

初恋

今年より夏暮せんとぞ思ひ立ちつ

他日秋を周るのぞくす不審なり

逢志

降る雪よ今宵ばかりは積りし

思ひまや花よやせたる水に流る

影法師月よよんで静けりな

別恋

まわくは重衣のゆ候ふ露多し

見送る戸も水の瀬のひたし

名恋

人よえぬ秋の糸の乱れを

恨恋

君の名は石よあつて洗ひ消す

初恋

椿花をよみ中絶えぬ五月雨

恨恋

まきしりの知りぬ秋の白鳥打つ

恨恋

あまをよみ今寝きつし捲きぬす

恨恋

五月雨や鏡目うつし恨りし

死恋

生さ代りし物身友らさしあすの草

化石して強面とくたう月

三十一

子規句

子規句

酒苦く蒲團薄くて揉りまぬ夜

ひたくと藻草刈るふと春の水

岩を廻る水よ海を恨むも

散るを多きが極ま看人と逢ふ油

出代の夫ぬ別れよ来りけり

人よ死し鶴よ生きたる涙返して

隻子は比良月生捕る汐干よ

恐るくば赤ん坊いそぎ着着

山を拾得の蜂よ整ささしは

ふるひをのせて白魚崩り人許り

落ちさすまを虫を伏せたる椿莪

食ひて驚る続け掃る啼く

のり猫の山寺よ来て戀をしつ

ぶつくと大な田螺の不平哉

菜の花や城代二萬五千石

明天子よある野の長閑なる

大ま轟や霞の中をゆく車

烈士剣を磨して陽火むらとちつ

柳あり江あり南書よ似たる吾

或夜夢は雛娶りけり白い酒

春水ニ川ルベキ
藻アリカサ
飯味解ス

霞みけに物見の松に熊坂が
 〇 醋熟して三聖擧す 桃の花
 〇 川を隔て牛散散らす点点丸丸霞みけり
 〇 薰するは大内といふ木白や春
 〇 姉様を参らす桃の押繪のた
 〇 よき敵を梅の指物するは諱
 〇 巖衣や顔よ似合ぬ戀あえ
 〇 住吉の繪巻を寫しける春
 〇 春は物の句となり易し古短丹
 〇 山の上は敵の赤旗霞みけり

〇 木虱咲くや漱石林を守るへら
 〇 瀧子し鳥突き當らんと志ははる
 〇 なある程日は大きなる涅槃像
 〇 春の夜を兼好緇衣に恨みあま
 〇 暖に乘じ一寒手風をみなおろす
 〇 達磨傲然と志て風を躡る鳳巾
 〇 心は大事餘寒烈しと致へば
 〇 董程な小さき人の子きたし
 〇 前坐の赤きまじむ土事うた
 〇 水に映る藤紫の鯉緋なり

明治三十年二月

漱石

病子規書評